構造分析に基づく読みと論理的文章形成

－相互評価活動による文章の改善－

M13EP001
石井　裕久

１．はじめに

（１）　現状と課題

高校生が書いた文章を読んで感じるのは，①課題文や設問を読み取れない読解力の不足，②自分の意見や理由を支える知識の不足，③適切な語句や言いまわしを選択できない語彙や表現力の不足，④読み取った情報や既存の知識を自分の意見を相手に伝えるために組み立てる構成力の不足である。

これらの課題の原因の一つとして考えられるのが書く経験の不足である。生徒に中学校の３年間と高校の３年間に意見文や小論文を書いた回数を尋ねたところ，大半が１回未満であり(図 1)，内容も課題や高校・大学入試の練習として指示されたものがほとんどであった。

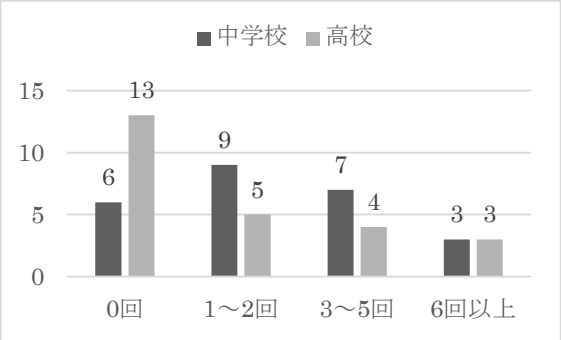

図 1　中・高時代の意見文・小論文執筆回数

よって，書く経験を積ませながら，上記の 4 つの課題それぞれについての対策が必要と言える。①については授業内で読み方を指導し，②については読書ノートや新聞スクラップの作成を勧めた。これは同時に③の改善にもつながると考えた。④については，自分の体験した順番通りに書く者が大半で，構成という概念がないという点において大きな課題である。

渡辺(2004)は,「日本では時系列が、アメリカでは因果律が、それぞれの叙述の基本構造である」と指摘している。渡辺はまた,「因果律では、結果として特定された出来事が最も重要である。時間軸を遡ってその結果に対する原因を探る過程で、一連の出来事はその結果への寄与によって序列がつけられ、結果には直接関係なしと判断された出来事は、語り全体から取り除かれる。(中略)因果律の構造は『論文』、特に科学的な論文に頻繁に使われる傾向がある。」(下線部引用者)と述べている。つまり，論文には因果律の構造が適しているということである。島田(2012)が,「高校時代に文章表現を学んだ経験の乏しい理系の大学初年次生も、大学に入学するや日常的に論理的な文章を書くことを要求」されると指摘するように，多くの生徒に共通して論文のような文章を書く必要性は高い。こうした場面で，生徒たちが適切に対処できるようにするために，因果律に基づく論理的な文章の書き方を身につけさせる必要があると考えた。

（２）　論理的な文章

野矢(2006)は,「論理」を,「言葉が相互に持っている関係性」,「論理的」を「さまざまな文や主張のまとまりが、たんに矛盾していないというだけでなく、一貫しており、有機的に組み立てられていること」と説明する。また，前田(2010)は,「論理的文章」の条件として次の８つを挙げる(次項表 1)。

表 1　論理的文章とは(前田(2010)より)

1	因果関係がある
2	テーマに一貫性がある
3	多面的に検証されている
4	論理に飛躍がない
5	因や理由に客観性がある
6	論理の段階が緻密である
7	理由が明確である
8	わかりやすいデータが使われている

これらを踏まえ，本研究では，「論理的な文章」を「客観的な事実に基づく理由を示しながら，自分の意見を筋道立てて述べる文章」とする。

（3）　これまでの経過

前年度は，まず，構造に着目した評論の読解を行った。これは，内容の解説に偏りがちであった自身の授業を改善するとともに，論理的な文章の構造を意識させるためである。次に，家庭学習として「平和」をテーマにした小論文 1 を書かせ，そのうち数編を取り上げて望ましい小論文の条件を考えさせた。これを踏まえ，「沖縄の平和」をテーマに書かせた小論文 2 を小論文 1 と比較した。また，授業の前後でアンケート調査を行った。

言語活動場面では，生徒相互の意見交流の中から授業者が期待した答えの多くが導き出された(表 2)。

表 2　生徒が挙げた望ましい小論文の条件

内容	物事をさまざまな視点から考える 意見に根拠を持たせる 具体例(体験)があるとよい
表現	本当に大事なものだけ「」を付す 同じ言葉や表現を使いすぎない 言葉の使い方に気をつける
構成	段落ごとの意味をまとめる 段落の構成を工夫する 題名と結論を結びつける

段落構成については意見が分かれたが，小論文では「起承転結」型は誤り(渡辺 2013)で，「序論・本論・結論」型で書くこと，各段落は「パラグラフ・ライティング」(北川 2005)で組み立てることを指導した。小論文 1 と 2 とを比較すると，段落の数や文の構造が精選され，頭括式の段落が微増した。また，生徒のアンケートからは，表現の工夫，題名や構成の重要性を認識したことが明らかになった。

２．目的

今年度の研究においては，前年度の取り組みを基に，相互評価を通して生徒が論理的な文章を書けるようにすることをめざす。「相互評価を通して」としたのは，友人に読まれることが生徒の動機づけになることに加え，評価者の立場を経験することが書く力の向上につながると考えたからである。相互評価の有用性については，山口(2010)，田中(2011)，渡辺(2013)等の指摘がある。相互評価活動の前後で生徒の文章がどう変化するのかを比較・考察する。

また，「論理的な文章を書けるようにする」ことは，狭義には「書く力」を伸ばすということになろうが，それを下支えするのは文章の構造を読み解く力であると考え，研究テーマを「構造分析に基づく読みと論理的文章形成」とした。

３．方法

対象　山梨県立 A 高等学校第 3 学年　25 人
　　（うち 21 人は前年度から継続指導生徒）
期間　平成 26 年 4 月～1 月
経過
①4～10 月，形式段落を意味段落や場面に分けて小見出しを付すなどの活動を取り入れ，構造に着目しながら教科書の文章や新聞記事の要旨や主題をとらえさせた。
②7 月，有山輝雄著「情報化社会と考える精神」を読んで考えを述べる小論文(字数:800 字)を執筆させた。

③10 月，小論文 3 を自己および相互に評価させ(資料 1)，生徒のコメントを集約して印刷し配布した。

④11 月，アイデアの整理法や構成メモの作り方，アカデミック・ライティングのポイント(資料 2)を紹介し，小論文の構成モデル(資料 3)を示したうえで，平野啓一郎著「無常ということ」を読んで考えを述べる小論文 4(字数:800 字)を執筆させた。

⑤1 月，これまでの活動を振り返る事後アンケート(資料 4)を実施した。

《前年度》　構造に着目した評論の読解
↓
小論文 1 の執筆
↓
望ましい小論文の条件を検討
〈生徒の活動に対する指導・助言〉
↓
小論文 2 の読解
〈小論文 1 と 2 との比較・考察〉
↓
構造に着目して評論・小説等の読解
↓
学んだ構造を参考にした小論文 3 の執筆
↓
小論文の自己・相互評価
〈評価したものを集約して指導〉
↓
評価・指導を参考にした小論文 4 の執筆
↓
事後アンケートへの回答
↓
〈小論文 1～4 の比較・考察〉
〈ワークシート・アンケートの分析〉

図 2　全体の流れ

検証

小論文 3・4 および前年度の小論文 1・2 を段落の数や構成，内容について比較・考察する。また，自己・相互評価で用いたワークシートや事後アンケートの記述内容から生徒の意識の変化を見る。

４.「読むこと」の指導

評論，小説，新聞記事などの要旨を読み取らせたり，主題を考えさせたりする中で，生徒が陥りがちだったのは，文章の一部分に限定した読みになってしまうことである。たとえば，ある新聞記事の末尾部分の結論は押さえられても，冒頭部分で述べられた現状への批判に触れない。あるいは，小説の読解で回想場面にばかりとらわれ，(小説の中の)現在と関わらせて主題を考えられない等である。

これらを克服するには文章全体の構造を見抜くことが必要である。全体を俯瞰することの重要性を説き，それぞれの文章の構造を示した上で，要旨や主題を改めて考えさせたところ，生徒からは読解が深まったとの感想が寄せられた。

５.「書くこと」の結果

（１）段落の数の変化

小論文 3 で段落数が 2 の者が 3 人いた。小論文 4 では大半の者が 4 段落としたが，6 段落に細分した者も 2 人いた(図 3)。

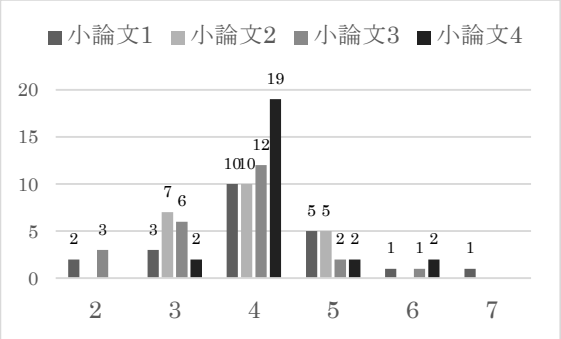

図 3　段落の数の変化

（２）段落構成の変化

前年度の研究においては，形式段落ごとの構成を分析した。その結果，小論文 1 から 2

では頭括式が微増していた。今回，文章全体の段落構成を比較すると，小論文１から３はいずれも尾括式が大半を占めたが，小論文 4 では双括式が倍増した(図 4)。

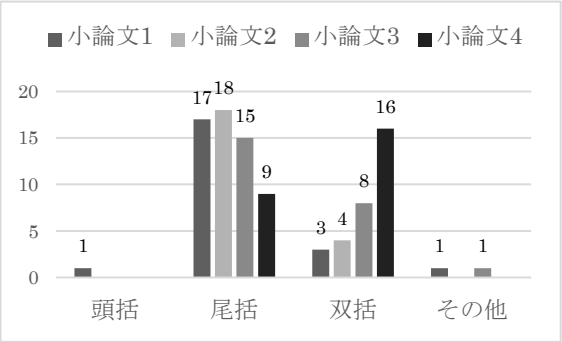

図 4　段落構成の変化

（３）要素の変化

小論文１から４を通して，問いを立ててそれに答える形で記述した者が約3分の1いた。

一方，自身とは異なる意見，予想される反論とそれへの対応を盛り込んで書いた者は，小論文１ではいなかったが，小論文２以降着実に増えた(図 5)。

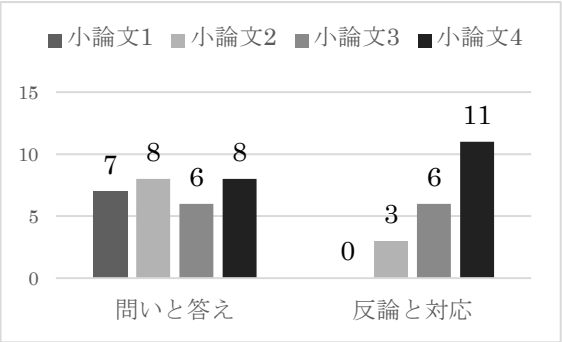

図 5　要素の変化

（４）相互評価と生徒の小論文

生徒 a と生徒 b とのやりとり(引用 1～4)，および生徒 c と生徒 d とのやりとり(引用 5～8)を抜粋して示す。

引用 1　生徒 a の小論文３(部分)

今、私達が生きる社会は「情報化社会」である。(中略)

最近はそこまで聞かないが、少し前に私はテレビ、新聞等で「情報」が関係するニュースを目にした。(中略)

これから先、時代が進むにつれて、これまでもそうだったようにメディア機器も発達していくだろう。そして情報の操作はより簡単になっていくと思う。その中で、一人一人の人間が正しい使い方をしていくことがこれから最も重要なことであると思う。

引用 2　生徒 b による評価（部分）

・「最近はそこまで聞かないが」は、聞かないなら省略した方が良いと思う。

・最終段落は意見、主張が書いてあるが、「～と思う」だと少し弱い。言い切ってもいいのでは。

引用 3　生徒 a の相互評価へのコメント

このように文章を作り評価し合うことは後の入試(小論文)にも役立つと思いました。指摘されたことを活かしてよりよい文を作れるようになりたいです。

引用 4　生徒 a の小論文４(部分)

「無常」という言葉を筆者は風景などの変化、世の中の移り変わりなどといった意味で捉え、具体的に京都は無常をかなしみ続けると表現している。私は、この無常という考えはこの世に必要不可欠なものであると思う。

無常というのは文字通り、変わらないものはないといった意味で使われている。(中略)私達が生きているこの世の中こそ無常であるといえる。(中略)より豊かさ・便利さを求めて世の中は変化し続けているのである。

ここで、現在の京都について考えると、(中略)八坂神社前のコンビニエンスストアもより便利さを求め変化した京都の一部に過ぎない。(中略)それを非難する人にもその場所を変わらぬまま保つということはできないはずである。

（中略）よって無常という考えは必要不可欠なのである。

引用 5　生徒 c の小論文 3（部分）

メディア機器が無い生活など想像できないが、メディア機器のおかげで生活が便利になっている反面、テレビやインターネットで得た情報に流されてしまったり、犯罪を助長する要素になり得る場合もある。とても危険な社会に生きていると言っても過言ではない。その社会の中で、私たちはどのように情報と向き合い生きて行けばよいのだろうか。（中略）

また、情報化社会で生きている以上、情報には敏感になる必要があると思う。情報は随時更新されていくのだから、自分が得たいと思う情報に関して、素早く反応するのがよいと思う。情報をできるだけ早く得て、吟味する時間を増やすことが大切だと思う。

（後略）

引用 6　生徒 d による評価（部分）

・3 段落目は全て「思う」で終わっていて意見だけしか言えていない。具体例を入れたり，一般的に考えられていることなどを入れるべき。

・主語が明確でない部分がある。冒頭ならば「私たち」を加えるなど。

引用 7　生徒 c の相互評価へのコメント

具体例などを入れてより詳しく書きたい。読む人のことを考えて主語をしっかり書けるようにする。

引用 8　生徒 c の小論文 4（部分）

筆者の考える無常とは、近代的な建て物が景観破壊に繋がるなどの時代の流れに逆らうようなことを言うのをやめて、なされるがままにしようということであると考える。（中略）

次に、筆者は保存すべきと主張されている風景は結局は幼少時代に親しんだだけの最近の姿であり、その主張は恣意的であると考える、と述べているが、私は主張がその人個人の記憶の中にある風景を残したいというものであるのは間違っていないと考える。実際に、私も家の近所にあった大きな木を切ってしまうということを聞いたときに、そこで遊んだことを思い出し、切って欲しくないと思った。

つまり、風景と記憶は切っても切り離せない関係にあると私は考える。

（後略）

（5）事後アンケートの記述

学習後，小論文を書くのに役立ったと思う学習活動は何かを複数回答で，最も役立ったと思うものを択一で尋ねた（図 6・項目の詳細は資料 4 参照）。合計値では，段落構成の種類を学んだこと（段落種類）と構成メモを作ったこと（構成メモ）が 25 人中 21 人と最も多く，パラグラフの構造を学んだこと（パラ構造）と小論文を書いてみたこと（小論書く）が 20 人，友人と小論文を読みあい、自己評価と相互評価を行ったこと（相互評価）が 19 人で続いた。

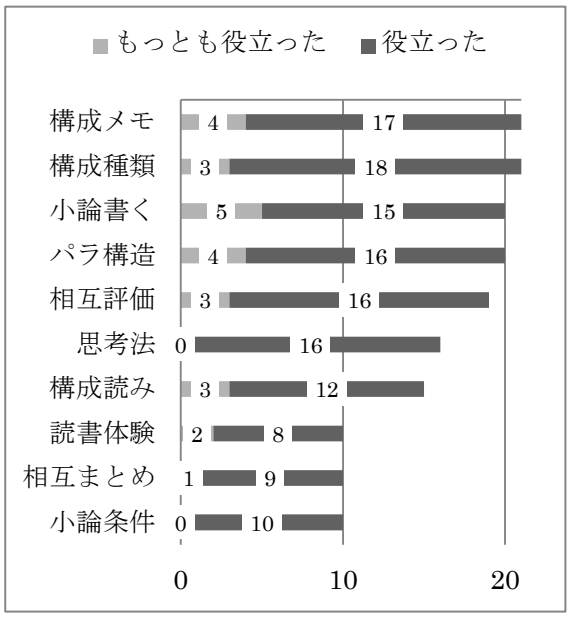

図 6　小論文を書くのに役立ったこと

「もっとも役立った」ことの最多は，小論

文を書いてみたこと(小論書く)の５人，次いで構成メモを作ったこととパラグラフの構造を学んだことが各４人であった。

６．「書くこと」の考察

（１）段落の数の変化

小論文３を２段落で書いた３人のうち生徒ｅは１つの段落に２つの内容が混在していたため，実質は３段落であった。逆に小論文４では１文のみで構成された段落があり，手前の段落と連続する内容なので，実質は５段落で構成すべきである。パラグラフ・ライティングに基づく段落構成について，さらに指導の徹底が必要である。小論文３が２段落構成であったほかの２人もやはり１つの段落に複数の内容を納めていたが，小論文４では段落ごとに内容が整理され，改善が認められた。

このように,段落の質にはばらつきがあり，形式段落の数がその小論文の論理構成をそのまま表すわけではないが，段落数４の者は概ね「序論・本論１・本論２・結論」の構成で書こうとしていた。

（２）段落構成の変化

小論文１から３で尾括式が多いのは，自身の体験を時系列に沿って記述したからである。一方，小論文４で双括式が増えたのは，相互評価後の指導で，小論文の構成モデル(資料3)を示し，結論を先に述べるように促したためであろう。頭括式や双括式という型の指導を通して，物事の因果律に着目させることができた。

（３）要素の変化

問いと答えのかたちで記す生徒が一定数いたのは，評論の読解などにおいて同種の文章構造に触れているからだと考えられる。

反論とそれへの対応の記述は，自身の意見の説得力を高めるものであり，小論文の質の向上を示している。

（４）相互評価と生徒の小論文

相互評価のフィードバックを活動の次の授業で配布した。今回の実践ではなかったが，的外れな指摘があった場合は授業者による訂正や解説が必要になるため，ワークシートの点検には慎重を期さなければならない。

引用した二つの例では,いずれも評価者(生徒ｂ・d)が的確な指摘を行い，被評価者(生徒ａ・c)はそれを前向きに受けとめて，次の小論文執筆に生かしていた。

全体的に被評価者の良いところを認めるコメントが多かったが，上記のように改善を促すコメントに対しても被評価者は前向きに受けとめていた。相互評価活動までに生徒同士の信頼関係が築かれていたためと考えられる。

（５）事後アンケートの記述

小論文を書くのに役立ったこととして，段落構成の種類，構成メモの作り方，パラグラフの構造の学習を挙げた者が多かった。本研究の目的の１つである，因果律による論理的な文章の書き方を身につけさせることへの一定の手応えと言えよう。小論文４の原稿用紙欄外に構成メモを記した者もいた(図７・８)。

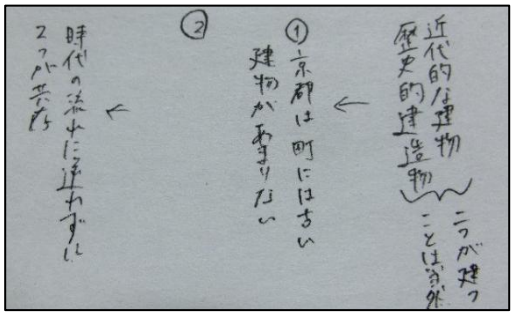

図 7　生徒ｆの構成メモ

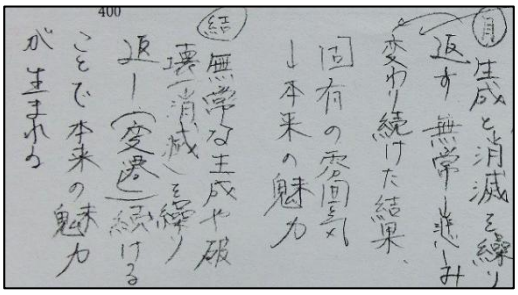

図 8　生徒ｇの構成メモ（部分）

また，望ましい小論文の条件を考えたり，小論文の自己評価や相互評価をしたりしたことを挙げた者も多く，読むことで評価の観点が明確になり，それが執筆の参考になったと考えられる。ただし，相互評価のまとめを挙げた者は相互評価したことの半分程度に留まった。

一方，もっとも役立ったことの最多は小論文を書いてみたことで，書く活動の不足と今後の充実を考えさせられた。

（6）成果と課題

相互評価のワークシート記述や事後アンケート結果から，説得力を持って自分の意見を相手に伝えるためには，時系列に沿って全てを記述するのではなく，結果とその原因に着目した因果律に基づく文章構成が重要であることは生徒に伝わったと思われる。本研究ではそれを頭括式や双括式といった段落構成の型を示すことによって実現したが，今後はその型から離れて論理的な文章構成の幅を広げてく。

また，生徒の相互評価活動についても肯定的に受けとめられ，文章の改善につながっていた。相互評価のまとめを重視した者が少なかったことは，クラス全体の概況よりも自分自身の評価をより重要視していることが感じられた。自身の評価に意識が向くのは当然であるが，他者の失敗に学ぶことはきわめて重要であり，個の学びを集団で共有する場面を設ける必要がある。

文章を書くための一連の流れや評価の基準などを教えた上で，活動の様子を注意深く見守りながら，生徒の相互評価活動を継続し，発展させていきたい。

７．おわりに

生徒の読む力と書く力を高めたいと考えて研究テーマを設定し取り組んできた。こうして振り返ると自身の授業改善の方向性が見えてきている。文章全体を俯瞰して構造をとらえながら読み解くことと，効果的な構成を考えて文章を書くことを実現するための方策は，昨今言われている学習者中心の授業スタイルへの転換と軌を一にするものである。

従来の知識伝達型から離れて，学習者である生徒たちが主体的に学びに向かう場の設定をこれまで以上に意識し，今後の実践につなげていきたい。

８．引用・参考文献

・北川達夫（2005）図解フィンランド・メソッド入門 経済界 56
・北原保雄編（2014）国語表現 大修館書店
・前田進（2010）見てわかる小論文短時間攻略法 改訂第3版 法学書院 203-207
・中村俊介（2010）「ピラミッド構造」で考える技術 すばる舎
・小野田博一（2010）13歳からの作文・小論文ノート PHP研究所
・野矢茂樹（2006）新版 論理トレーニング 産業図書 7
・島田康行（2012）「書ける」大学生に育てる 大修館書店 4
・田中信之（2011）ピア・レスポンスが推敲作文に及ぼす影響 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル3 9-20
・渡辺雅子（2004）納得の構造 東洋館出版社 12-13
・渡辺哲司（2013）大学への文章学 学術出版会 55
・山口恵子（2010）パラグラフ・ライティングを基礎にした文章表現指導 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル2 66-83

・早稲田ウィークリー2014年6月23日号 http://www.wasedaweekly.jp/detail.php?item=1094

資料１　小論文評価の観点(学研小論文模試の項目を参考に作成)

評価項目	評価のポイント
課題の理解	要求に応えているか　設問，課題文，資料を読み取れているか
意見の明確さ	言いたいことが伝わるか　意見がぶれず一貫しているか
論述の内容	説得力があるか　理由を裏付ける客観的事実が書かれているか
文章の構成	文や段落の組み立てが適切か　文にねじれはないか　段落分けされているか
表現・表記力	語彙は豊かか　原稿用紙の使い方は適切か

資料２　アカデミック・ライティングで心掛けたい６つのポイント

（早稲田ウィークリー2014/6/23 号より）

・一文一義　一文に一つの事柄を書く。
・語句　「語句」の意味範囲を意識して使う。また、専門用語は定義して使う。
・構成　学術的文章は「序論・本論・結論」という構成。
・〈問い〉と〈答え〉　〈問い〉と〈答え〉が書いてあるか、呼応しているか。
・パラグラフ・ライティング　パラグラフは［中心になる一文＋それを支える文］で構成。
・主張と根拠　まず主張を端的に書き、次に客観的で適切な根拠を示し論証する。

資料３　小論文の構成モデル(中村(2010)，小野田(2010)を参考に作成)

設問の要求・課題文や資料の理解
↑　合致
序論　自分の意見
↓　理由（意見を支えるもの）１　←　事実（理由の根拠となるもの）１
本論　理由２　←　事実２
↓　理由ｎ　←　事実ｎ　理由の数＝段落の数
結論　自分の意見（再）

資料４　事後アンケートの質問項目

構成読み……評論や小説，新聞記事等の構成を考えながら読んだこと。
構成種類……段落構成（頭括式・尾括式・双括式）について学んだこと。
小論条件……友人の小論文を読み、望ましい小論文の条件を考えたこと。
読書体験……日ごろから本や新聞を読んだり、体験したりして知識を増やしたこと。
パラ構造……パラグラフの構造（話題文と指示文）を学んだこと。
相互評価……友人と小論文を読みあい、自己評価と相互評価を行ったこと。
相互まとめ…上記の相互評価のコメントをまとめたものを配布し、総括したこと。
思考法……ウェビング・マトリクス・ベン図などによる発想や思考の方法を学んだこと。
構成メモ……構成メモ（記述する順番や分量を決める）を作ったこと。
小論書く……小論文を書いてみたこと。